

専門書翻訳に挑む

タイトル

①『修復的司法とは何か——応報から関係修復へ』

著者名：ハワード・ゼア；Howard Zehr

監訳＝西村春夫・細居洋子・高橋則夫 訳者：浅川エリ子他 14 名

出版社：新泉社、2003.6.30 初版 第 3 版出版 価格：2800 円＋税

②『修復司法の根本を問う』

著者名：ゲリー・ジョンストン；Gerry Johnstone

監訳＝西村春夫 訳者：浅川エリ子他 5 名

出版社：成文堂、2006.5.31 価格：5300 円＋税

③『これからの犯罪被害者学——被害者中心的司法への険しい道』

著者名：ジョー・グディ Jo Goody

監訳＝西村春夫 訳者：浅川エリ子他 6 名

出版社：成文堂、2011.6.10 価格；8000 円＋税

50 代から取り組んだ翻訳作業の集大成として、3 冊の専門書を共同出版しました。①と②は修復的司法〈Restorative Justice〉という近代刑事司法の新たな流れ、③は犯罪被害者学〈Victims and Victimology :Research, Policy and Practice〉という原題の通り、主に被害者の権利主張、被害者支援を扱った内容となっています。

①は 1999 年に出された画期的な著書で、原題〈Changing Lenses〉が示すように応報/復讐と修復/人権という理念をバランスよく取り入れ、懺悔・和解・癒しを目指す修復司法の原典となっています。「レンズ交換」即ち「視点の変換」こそ、プロの写真家でもあるゼアの真骨頂でしょう。

本書で注目される点は、コミュニティ司法—歴史に見る代替手段、聖書における法とジャスティス、被害者—加害者和解プログラム、量刑サークルと家族集団カンファレンスの実践例などが詳細に示され、修復レンズとしての理念と可能性を多岐にわたって示した良書です。当時本書はマスコミでも広く取り上げられ、「修復」という言葉が流行ったということです。尚、本書は文科省から助成金が出されており、頁数が多い割に一般教養書並みの廉価となっています。

②著者ゲリー・ジョンストンは、冒頭の「日本語版への序文」の中で述べているように、日本はすでに修復という理念が実際の刑事司法でうまく機能している一方で、懐疑論者も多いという現実を知りました。

本書では修復司法の検証、限界、危険性を述べると同時に、加害者に対する応報的司法の代替手段としての修復司法の刑罰・処遇・具体策等を問い掛けています。それは司法改革や犯罪防止の観点からではなく、あくまでも被害者中心の思想から問い直し、人間と社会の変革を目指すものだと論じています。

③先ずここでの被害者とは、自然災害その他各種被害者の中の犯罪被害者を指しています。200 年ほど前に近代犯罪学が興って以来、なぜ犯罪・非行をするのか説明するための実証データと非行理論・犯罪理論を構築してきました。21 世紀初めの刑事司法の発達により、犯罪被害者及び被害者学的重要性が高まり、被害者が脚光を浴びるようになると同時に、被害者中心の研究、政策、実践がますます評価されるようになりました。被害者を位置づけるうえで、「犯罪の恐怖」「無防備性」に対する理解、「リスクと結果」の比較考量が重要であり、一方で被害者のニーズ・権利の強

化と加害者の権利との均衡をとる必要もあります。場合によっては被害者に対する国家補償や損害賠償の理論的根拠も示されなければなりません。

修復的司法による被害者中心へのアプローチとして、北米や英国における調停の発展が興味深く語られており、昨今ではグローバル化による人身売買、ホワイトカラー犯罪、不法収益、詐欺、資金洗浄といった姿の見えにくい犯罪も浮上しており、国家的政策が強く求められています。

「監訳者あとがき」の最後にある【追記】によれば、本稿脱稿直後にあの2011.3.11の巨大地震が発生、それに伴う大津波、原発事故等々甚大な被害が人々を襲ったことは記憶に新しいところです。こうした環境汚染や薬害など被害者をめぐる問題は山積しています。

投稿者：浅川（旧姓西村）エリ子 IP 1958 年卒業